会員便り

歴史と戦争と平和の善悪

中林幸夫
（会員・香川県綾歌郡国分寺町）

日本、いや世界に於いても歴史に戦いは書かれているが、平和は正確に書かれていない。本当の平和はあまりないのかもしれないが、戦後の五十年は本当に平和だった。これは戦争の苦しさ。惨めさを知った国民が、平和憲法を頭において守り続けたためだと思う。だが最近、米国というおかしな思想によって危ない政治的方向に向かいつつある。

徳川三百年の歴史を考えると圧政に農民は苦しめられたが、国全体を考えると戦争に明け暮れしたよりは平和とは言えないまでも、戦乱の中にいるよりはましであった。

戦国時代、豊臣時代記録にはないが国民は苦しめられたと想像する。秀吉が厳しく太閤検地などを実施しているのは、朝鮮への出兵などの費用がかかりすぎたからである。

今、世界で行われているアフガン、イラクと徳川時代の圧政と似ている感がする。国民にとっては圧政より戦争の方が苦しい。戦いで解決しようとする考えはおかしい。

団塊の人たちも五十歳を越えた。日本は平和憲法のおかげで戦争から隔離されていたため、本当の平和が続いていたことを忘れかけている。戦争時代を体験した昭和一桁時代の人たちにとっては、言い表せない惨めな苦しみがあり、不幸になった人も多い。

北朝鮮の独裁主義のニュースを見聞きするたびに、戦時中の日本と比較して日本の方がもっと厳しい独裁主義であったと、考えさせられることが脳裏に浮かぶ。

北朝鮮の軍隊、青少年のパレードを見るたびに、精神的な訓練の行き届いていることを感心させられる。隊列行進は一致団結しなければならず、スポーツ大会の行進などと比較すると、あれだけそろった行進は簡単にはできない。心身ともに教育され、厳しい訓練の現れである。独裁主義の一致団結した精神教育にも素晴らしいものも

ある。だが、戦時中の誤った歴史教育には反省し、考えるべきものがある。

私は戦時中、小学生の時代に受けた先生方の暴力的精神教育に対して、それを考える時、腹が立ってならない。今でも当時の先生たちは常識的な知識があったのかと、疑問を抱く。

軍艦が神風で沈没するとか、雨のように爆弾を投下する米軍と竹槍で戦おうという戦法、藁人形に竹槍で突撃して勝てると思っていた先生方が多く、真剣に教えていた人たちの精神を問いたい。

アフガン、イラクと米軍は独裁者が悪いと爆撃して関係ない一般市民を巻き込み、破壊して正義だと言うが、これが正義かと疑いたくなる。最近、なぜか日本が米国の間違った正義感に引きずり込まれそうな気配になりつつある。米軍の油や弾薬を運ぶ後方支援業務は、戦争に加担していることになる。人間はともすれば教育によって騙され、善悪の識別を誤ることがある。

会員の中にも戦時中、教壇に立たれた人も多いと思うので、当時の心理状態を教えていただければと思っている。

米国民はテロ撲滅を叫び、戦争を正義のように言うが、弱い者たちがテロによって報復しようとする原因は、強いものが今までにした行為にあるということを論議していない。

日本国民は米国にしっぽを振ることばかりを考えずに平和を守ることを率直に考え、真の正義を守り、言葉の虚偽の正義に惑わされないようしなければならない。戦争は正義をかぶった犯罪である。罪もなく殺されていった人たちは誰に訴え、救いを求めればいいのか。平和を守る歴史を勉強しようではありませんか。

平和は人間の作った最高の誇り、戦争は最低の行為である。

朝鮮戦争の終了後、初めて釜山へ行ったとき、いたるところに要塞が築かれ、兵隊が厳しい顔をしていた。時の韓国大統領、李承晩は反共、反日を掲げており、韓国人は平和にはほど遠い日を過ごしていた。

私は拿捕されている日本の漁船の様子を知りたくて、港の写真を撮影していたら、警察官に捕まり派出所へ連行された。取調べの時腹がたったので、米国軍が韓国に大手を振って闊歩しているが、韓国に米軍がいる限り平和はこないと言ったら、釜山警察署に連れて行かれ、日

本語の堪能な外事課長に取り調べられ、写真をとられた。

『平和』のような善良なものはみんなで叫び続けていなければ、知らぬ間に『戦争』の陰に隠されてしまう。もっとみんなで平和を叫び続けようではありませんか。歴史の中の平和はどれくらいあったでしょう。

地名のルーツ

◆竹野浦河内（蒲江町）

この地方の大字地名がすべて○○浦と呼ばれるなかで、ここだけが竹野浦河内と、浦の下に呼称が続いている。むしろ変則な地名がどうして付いたのであろうか。

竹野はもちろん、竹の自生し繁茂する野、河内は川に添った渓間の小平地盆地のことである。竹の多い川添いの小平地だからといっても、竹野浦河内の地名の解答にはならない。

この浦の小字、久保浦から岬寄りに竹野浦と呼ぶ小字があるが、この地名との関連も考えられぬ気がする。

◆西野浦（蒲江町）

入津浦において、地理的にはむしろ一番東に当たる地に、どうして西野という地名がついたのか、疑問の生じるところであるが、根拠もなしに西をつけたとも思えない。少なくとも西と呼ぶにふさわしい条件があったと見るべきであろう。

通説によると、この地に人々が定住したのは、今の古川才のあたりという。人口の増加や、生活圏の拡大に伴い、人々はより広い居住地を求めて順次湾の奥に移動したが、先住者たちの子孫は最後まで古川才に残り、生業の上でも、先覚者としての立場を守り通したという。その彼等にとって湾奥の集落がどのように大きくなってもそれは西ノ浦でしかなかったのであろう。

古小浦が古川才のすぐ地かた寄り、中小浦は現在通称中川原と呼ばれる土地にある小字名がある。移動につれて呼称も変わっていったものであろう。（『蒲江町史』）